

「松坂の一夜」についての私見

宣長の話が続けているが、狙いは、近代における国学の再定礎のなかで宣長も契沖も、文献学者として捉え返されたというところにある。

私は、契沖についても、宣長についても、哲学的な思考にもとづいた解釈学者だと考えており、しかも、彼らはシュライマハーにおける解釈学の定礎よりも早い時点で、それ以上の実績をあげている。しかしながら、そのような見方は全くなされてこなかった。

近代に再定礎された際に国学は純粋な文献学として再構築され、そのまま「国文学」の内実を埋めたのであるが、そのことによって、国文学が国学の思想性に対してアプローチをすることをやめ、同時に、国学が内包していた哲学的思考までも忘却したからである。

東京大学文学部だけを見ても、仏文科、独文科からは哲学的な方法研究による文学研究が出ているのに国文学科にはそれがない。私が在籍していた1980年代には国文科の学生のなかにも方法論を求める者も少なからずおり、上代文学の自主ゼミでもポール・リクルの著作を読んだりしたが、教授の側には哲学的な理論を教えられる人がおらず、授業はもっぱら「〇〇は読んだか？」式の文献学で進行していた。私は仏文科に非常勤で出向してきていた丸山圭三郎氏の教えを数年にわたって親しく受け、ソシュール、フーコー、デリダの原書をどう読むかについて教えを受けた。また、その後デリダのゼミも受講した。読みの理論はすべて国文科の外で学んだのである。それは、国文学科で理論を教える授業がなかったためである。世界の文学研究の動向のなかで、自国の文学研究についてこれほど哲学に無縁な研究方法を維持している国は稀だろう。

その原因は、言語学と文献学と国学を3本の柱として形成された国語国文学の定礎のし方にあるのではないか。

東京大学の国語国文学の系譜の中でも時枝誠記のように独自に哲学を組み込んだ言語学を構築した学者も出たが、その後任の築島裕にいたって訓点資料によって平安時代語を究明するという没理論的な路線に転換した。私もその教えを受けたし、著作・論文も読んだが、17世紀の契沖や18世紀の宣長の本をじかに読んだ方が古代語および古代を理解するためにはよほど勉強になるし、問題も明確になるというのが偽らざる実感である。訓点語の研究に付き合っているとほかの研究にさく時間がなくなる。学生には、訓点語の研究ではなく、そこから得た結果を体系的に示すべきだ。

『万葉集』や『古事記』の漢字日本語文をいかに読むかという問題——私流に言えば、日本語のエクリチュールの生成の問題——は、なお、古代語研究の中核的な方法であるべきで、実際、山口佳紀氏の諸研究、さらに沖森卓也氏の諸研究は、国語史・古代語研究の領域において、豊かな成果をもたらしている。山口、沖森両氏のお蔭で、古代日本語研究は高い水準を取り戻している。世界に知られるべき研究である。

ともあれ、デリダやフーコーに代表されるような理論書は、西欧諸国の学者たちにとっては学生時代から親しんでいる基礎教養の一環であって、それらをまったく知らずに彼らと対等に議論することは不可能だ。「〇〇は読んだか？」は外国人には全く通用しない。彼らにとっては「理論」がない研究は研

究ではない。

しかし、より深い問題は、理論的な枠組みのない表層的な実証主義が、17世紀の契沖や18世紀の宣長の真の実証主義の意味を覆い隠しているところにある。今日の万葉学者は『代匠記』を「引くもの」にしてしまい、『代匠記』から『万葉集』を学ぶことをやめているのである。『代匠記』の思想と方法は、その「惣釈」にあますところなく書かれているのだが、呆れるほど読まれていないのである。

さて、012稿や015稿によって、「松坂の一夜」の初対面の場では、『古事記』の注釈についての議論がメインであったとする佐佐木信綱の解釈に対する異論を提示してきた。もちろん一夜の出会いにおいて『古事記』の注釈について議論が出たとしてもおかしくはない。が、012稿で確かめたように、日記においても、『玉勝間』においても、宣長は初対面を挨拶として書くにとどめており、本格的な質問は入門後のこと、つまり対面のあった宝暦13年の翌年からのこととしている。

事柄の整理としては、宣長の日記と『玉勝間』の文面をそのまま受け取った方が筋が通るのである。要するに、宣長は、学術上の知識についての質疑応答は「入門」という関門を通過して後に初めてするものだと考えていたのだろうし、師弟はそのけじめは明瞭に意識していたはずだ（けじめというものを喪失してしまったわれわれの時代から見れば、かえって不自然に映るのかもしれないが。）実際、日記には「初対面」としか書いていないし、『玉勝間』にも「いそぎやどりにまうでて、はじめて見え奉りたりき」と対面の事実を記すのみで、「教へをうけ給はること」は「つひに名簿を奉」った後のことだと記しているのである（筑摩版全集第1巻、p.86、「おのが物まなびの有しやう」の末尾参照）。

そもそも、日記からも分かるように、宣長は、その日は巖松院の歌会に出てから、真淵の松坂入りを聞きつけ知って、「いそぎやどり（新上屋）にまうで」たわけで、とるものもとりあえず馳せ参じたのである。また、その初対面以前には、二人の間にはまったく書簡などのやりとりはされていない。真淵から見れば突然の出来事だったわけである。

しかし、それでは、二人がじっくり『古事記』について語り合うという物語の流れにはなりにくい。宣長はあらかじめ真淵の来臨にそなえて準備をしていた方が話は分かりやすくなる。そこで佐佐木は「柏屋の老主人より聞ける談話」を織り込むことにしたのではないか。また、伊勢神宮への参宮からもどったばかりの老大家をつかまえて宣長が長時間の談議に及んだとすれば、好ましい人柄にも思われなかったであろう。

それが「見え奉」ること、つまり、自分を知ってもらうことが目的の対面であったとしても、なぜ自分が夜分に押しかけて来たのかを丁寧に説明する必要はあったはずだ。京都での留学経験を含めた自己紹介もしたのではないか（宣長がついた師の堀景山は契沖の孫弟子にあたる樋口宗武とともに契沖の著作『百人一首改観抄』を上梓した人である。また、宣長は京都留学の最終年に樋口宗武所蔵の『万葉集』から契沖の諸説を書き写し終えている）。そうでなければいきなり旅宿に押し掛けて来た松坂の医者を真淵がまともに相手にするわけがない。その後に展開する濃密な師弟関係から遡って見れば、初対面の晩だけで、真淵は宣長を信頼すべき相手だと判断したのである。その判断を勝ち取り得るような態度と言葉とが宣長の側にあったと見なければならぬ。

問題は、宣長が対面を求めた理由をどう説明したかである。

佐佐木信綱は、それを『古事記』の注釈の計画を告げるためとしたのだが、私はそれは違っていると主張し

ているのである。

私の考えはこうである。宣長は、自分が真淵の『冠辞考』を読んで深く感銘を受けた由を伝えたのではなかったか。

『冠辞考』こそ「読書の学」という視点から見なければ理解できない書であり、それは「古言」から「古意」を得るといふ真淵の思想を具現化した作品であった。宣長はそうした理解を真淵に伝えたのだと思われる。しかし、それも存外控えめで簡潔な言葉のやり取りのうちに言われたのではあるまいか。自分自身弟子を抱え、講義を開いていた宣長が、そのあたりの礼儀をわきまえていないはずがないと思う。私には、老大家を前にした宣長が雄弁に自己を主張する〈絵〉などは思い浮かばないのである。

宣長が真淵を前にしてペラペラと自己PRをしてもおかしくはなかったなどと想像するのは、ますますアメリカナイズされつつある戦後日本人の発想であって、戦前までの日本人は年長者の前では言葉を謹むのをよしとしていた。だいいち、ぺらぺらしゃべること自体がまれであった。男の場合は特にそうであった。

だから、私が思い描く〈絵〉のなかでは、従者の太右衛門もわきに控えていて、宣長はずいぶんへりくだった態度で恐る恐る真淵に対する敬意を述べている方が自然である。いったい真淵という人間が、異郷でいきなり押しかけて来た医師と称する男から古の学問をしておりますと告げられて、私の古学はまだ途半ばですなどとへりくだったりするだろうか？

真淵と宣長の対面はごく静かに、言葉よりはむしろ相手のたたずまいを見ながら、互いの力量をはかるような具合になされたのではないか。

ともかく、宣長がまず真淵の『冠辞考』についての感想から切り出さなかったはずはない。

そして、恐らく、真淵の口をついで出た言葉は、恐らく、宣長が『冠辞考』に読み取った思想と一致したのである。二人の学者のあいだには、たった一度の会見でも分かりあえるほど端的な共感関係が成り立ったのだが、それを可能にしたのは、お互いの『冠辞考』についての意見の一致であったと見るのがもっとも自然である。

そうであって初めて、「共同研究」とも言いうるような、その後5年間にわたる『万葉集』についての書簡の往還が始められ得たのであろう。『冠辞考』についてのやり取りから確認されたお互いの思想上の一致こそが、『万葉集問目』にまとめられることになる膨大な質疑応答の根底をなしているというのが、私の読みである。

また、宝暦13年5月に対面してから入門までには半年以上の時の経過がある。このことから、宣長の側に熟慮の時間があつたと見なければならぬ。宣長はすでに『古事記伝』の執筆にとりかかろうとしていたわけで、その時期に真淵との往来をすることに関して慎重を期したのではないか。実際、明暦年間に入ってから、宣長は『古事記伝』の執筆と真淵との『万葉集』研究を並行して行っていることになる。佐佐木の創作のようにいきなり『古事記』注釈の計画をして意気投合する状況になったのだとすれば、こうした展開になるはずはない。

このように見てくれば、佐佐木の筆になる「松坂の一夜」が、本当は入門後に真淵が書簡で書き送った「さとしごと」を初対面の晩に語ったことに作り替えたことは明らかだ。

真淵は、初対面の場において、「自分は古道を明らめようと思いつつも『万葉集』の研究で終わって

しまい、『古事記』研究を十分に明らかにできなかったので、それを宣長に託そう」と述べたと、佐佐木は描いたのであるが、それはあまりに出来過ぎた展開であるのみならず、実際にあったことやあり得たことを歪めたのである。

私自身、この研究で『玉勝間』を再読し、日記を見返し、真淵宣長の往復書簡を見返して、初めて「松坂の一夜」の物語の不自然さに気づいたわけで、最初に思い込みがあると、幾度もそのテキストに目を通していても気づかないことがあるものだと思知らされたのである。

2020年3月29日 研究代表者 西澤 一光